

## 研究ノート

## 福井藩士大道寺友山

堀井 雅弘\*

はじめに

1. 大道寺友山について
2. 半知後の藩政と「越叟夜話」
3. 福井藩大道寺家

おわりに

## はじめに

近世を代表する兵法家のひとりである大道寺友山は、複数の藩に仕え、また多数の著書を残している。その中の一藩が福井藩<sup>1)</sup>であり、著書の中には「越叟夜話」<sup>2)</sup>という福井松平家を主題とした一冊がある。

福井藩・福井松平家といえは親藩の中でも御家門でさらにその筆頭となり、「制外の家」という言葉で表されるように御三家や御三卿とも異なる特性をそなえていた。石高は結城秀康が越前国68万石を拝領して以降、次代松平忠直の隠居・配流、忠直の子・光長と忠直の弟・忠昌との国替、分知や忠昌の跡を継いだ光通の自害、支藩合併などがあり、光通の遺命で藩主となった昌親の代には47万5280石と当初の約3分の2まで減少していた。この間家格を下げられることはなかったが、貞享3年(1686)、続く綱昌が改易されて石高の半分近くを召し上げられるという一件があり、ここで遂に家格も下げられることとなった。藩のあり方や意識にも変化をもたらしたこの一件は「大法」や「半知」といわれ、藩政期より既に藩史上の重大な出来事のひとつに数えられた。

友山はこの一件の後、正徳4年(1714)に召し出された。この時既に76歳と高齢であったが、著書の成立年代に鑑みると福井藩に召し抱えられていた期間は「越叟夜話」に限らず複数の著書に関わり、友山にとっても極めて重要な時期であったと考えられる。しかし、友山に関する研究の多くは著書、或いは思想が主題とされ、一部を除いて性格や経歴などの人物像はその補足に止まる<sup>3)</sup>。一方、福井藩に関する研究でも友山の人物像、或いは友山と福井藩の関わりを追究したものは管見の限りない。

以上のことから友山の人物像を探ることは半知後の福井藩、特に吉邦代の藩政の一端を解明することにも繋がると考える。そこで本稿では松平文庫<sup>4)</sup>に残る史料から友山と福井藩との関わりを検討し、今後の研究の一助としたい。

---

\* 福井県文書館古文書調査専門員

## 1. 大道寺友山について

まず、大道寺友山の経歴を確認しておく。そもそも大道寺という家名は京都にあった大道寺村に由来しており、京都で発祥したとされる。大道寺家は伊勢家と姻戚関係にあったとされ、駿河下向以前から伊勢盛時（北条早雲）に従い、北条家が戦国大名となった後は重臣の御由緒家のひとつとして仕えた。友山の曾祖父・政繁は主家滅亡時に自害し、友山の祖父・直繁は徳川秀忠に召し出されたものの傍輩の喧嘩に巻き込まれて誤殺された。ここで家は断絶の危機に陥ったが、秀忠によって存続が図られ、友山の父・繁久は高田藩主松平忠輝に召し出された。しかし、忠輝が改易されてそのまま越後で浪人となり、寛永16年（1639）に友山が生まれた後、数年で没した。

友山は越後で養育された後、江戸で小幡景憲や北条氏長らに学び、山鹿素行に師事したとされる。初め広島藩支藩三次藩主浅野家の屋敷に寄居し、次いで浪人となって武蔵国岩淵に居を移した。その後元禄4年（1691）、兵法家として会津藩から合力米を下され、同10年、藩士として召し出された。会津藩では藩主正容に軍法を伝授するなどしたが、同13年、意に背いて召し放たれ、再び武蔵国岩淵に戻って隠棲した。そして正徳4年（1714）、隠棲していたところを福井藩主松平吉邦に召し出され、享保2年（1717）に隠居、同15年に92歳で没した。

友山の主な著書は「岩淵夜話」「越叟夜話」「落穂集」「霊巖夜話」「駿河土産」「武道初心集」などである。友山が吉邦に召し出されてから隠居するまではわずか3年足らずの短い期間で、隠居してから没するまでは10年以上の時間があった。上記6冊の内、「岩淵夜話」は隠棲中、「越叟夜話」は福井藩に召し抱えられていた享保元年（1716）、「落穂集」「霊巖夜話」は最晩年の成立である。残る2冊の成立年代は未詳であるが、友山は晩年によく書き著したとされる。「岩淵夜話」「霊巖夜話」「駿河土産」「落穂集」は徳川家康を中心とした伝記で、他の伝記には記されていない事歴を含む。「武道初心集」は一般的な武士道書であるが、近世に「武士道」として継承された戦国時代の余習が儒教の普及によって発展した「士道」を強く反映しており、また天保5年（1834）には松代藩で改訂・出版されている。これらのことから「徳川時代の武士道を代表する書物」<sup>5)</sup>や「天下泰平を代表する『ソフト武士道』」<sup>6)</sup>など近世を代表する武士道書と評され、「武士道」を強く反映した「葉隠」と対比されることもままある。これらに比較すると「越叟夜話」は福井藩の秀康・忠直・忠昌と主題がかなり限定されていることがわかる。

福井藩では忠直の子・光長と忠直の弟・忠昌との国替によって生じた福井松平家と津山松平家との本家・嫡家関係を検証するため、越前松平家の系譜を確かめる作業を繰り返し<sup>7)</sup>、半知から4代後の宗矩は家格の再興を課題として御三卿のひとつ一橋家との養子縁組を実現した<sup>8)</sup>。「越叟夜話」は32の間答から成り、秀康・忠直・忠昌のみならず家老本多家にも触れながら、福井松平家が徳川家の嫡家で越前松平家の本家となり津山松平家は越前松平家の嫡家となると結論づけている<sup>9)</sup>。同書の目的が本家・嫡家関係の検証であったことに疑いはないが、その成立を藩史上に位置づけると新たに藩政との関連が浮かび上がってくる。

## 2. 半知後の藩政と「越叟夜話」

貞享3年（1686）の石高半減と家格低下を招いた一件、いわゆる「貞享の半知」は藩政の転換点と

なった。

半知後の藩政は再封した綱昌の前代昌親（吉品<sup>よしのり</sup>）の下で推し進められたが、石高においては47万5280石から25万石と半減した影響で藩士の約3分の1が召し放たれ、引き続き召し抱えられた藩士も給禄は半減となって中士以下はさらに支給方法も変更された。これによって従来の家臣団の構成が崩れ、藩は家臣団のみならず諸制度の再編を余儀なくされた。また、藩札の発行と大名貸の借入を停止し、続く吉邦が襲封した翌年、正徳元年（1711）には「御先祖御相続の御国反乱程之困窮、度々用金ニ家も離れ、家職をも相止申者茂有之由、勿論家中渴命の仕合」<sup>10)</sup> というほどまでの状況に陥っていた。家臣団と諸制度の再編は吉品代に進められておおよそ整備されたものの、藩政、特に藩財政の立て直しは続く吉邦の課題として残った。

家格においては総下座・元朝列座の不要、偏諱の下賜停止、葵紋の使用禁止、伺候席替えなど、多くが変更された。また、参勤交代時の大名行列にも制限がかけられるなど外面的にも家格の低下は明らかとなり、続く吉邦の初官にも影響を与えた。

以上のように半知の影響は財政面に顕著であったが、精神面にも少なからず影響を与えたであろうことは想像に難くない。こうした後で友山を召し出した吉邦は、享保3年（1718）に次の書付を下している<sup>11)</sup>。

御家中侍中并其以下ニ至迄、武芸相嗜候事、古今不珍候共、怠り安儀も可在之候。向後、他を不顧、随分精ニ入可為修行候。別而親掛り之面々障ニ罷在候間、専稽古可在之候。人々之嗜第一之御奉公と被思召旨、被仰出候条、面々可被存其旨候。以上。

士分・卒を問わず、武芸の修行を精励し、特に部屋住みは稽古に専念するよう求め、武芸の修行・稽古を「第一之御奉公」とする。この書付と前後して家中の不行跡が明らかになっているが、吉邦はそれ以前よりたびたび武芸諸術を観覧しており、武芸の奨励は吉邦の政策のひとつであったと考えられる。

吉邦が友山を召し出した経緯は未詳ながら、半知、そして吉邦の政策と合わせて考えると、半知で低下した藩士の意識向上、ひいては藩政の是正が念頭にあったと考えられる。これが友山を召し抱えた理由のひとつであろう。そうすると「越叟夜話」は単なる本家・嫡家関係の検証の成果ではなく、吉邦の施策にも関わるものと考えられることができる。

### 3. 福井藩大道寺家

大道寺家は友山の他にも数家あったが、本家当主の通称・孫九郎は友山が受け継いでいた。そして、享保2年（1717）に友山の子・重高が召し出されて以降、本家・孫九郎家は福井藩の大道寺家となり、重高から5代後の繁毘代に明治維新を迎えた。また、重高の後、宝暦6年（1756）には分家・七郎右衛門家が成立し、繁長以降は2家に分かれている<sup>12)</sup>。

福井藩大道寺家は「姓名録」<sup>13)</sup> に「初代重高」とあって「剝札」<sup>14)</sup> も重高から始まっている。重高は300石をもって江戸で召し出され、若殿様附御取次、江戸御留守御用、御奏者席並などを務めた

孫九郎家

孫九郎重高（繁郷）—主殿繁長—孫九郎繁省—勝之進繁賢—孫九郎繁貴—芳三郎繁毘

七右衛門家

元橋繁候—主水繁睦—元橋繁宣

図 福井藩大道寺家系図

大道寺弘義『大道寺友山 その人間像と教育思想』「姓名録」「剝札」による

後、元文2年（1737）と寛延2年（1749）にそれぞれ100石を加増されて500石となった。また、隠居後の安永2年（1773）、85歳の時には宗矩の命で「越城亀鑑」<sup>15)</sup>という「某御内用相勤候節之覚書」を上げている。その後、延享3年（1746）に召し出された繁長は御側本役席、寄合次、御用人席、書院番頭格など、明和7年（1770）に召し出された繁省は寄合となり、御用人御奏者兼、書院番頭格などを務めた。続く重賢、繁貴も寄合席となり、繁貴代の文政12年（1829）には国許への引越しを命じられて福井へ移っている。そして天保7年（1836）に召し出された繁毘も寄合となり、諸役を務めた。友山の兵法家から役割は変化したが、近臣として藩主に側で仕え、寄合として藩政を合議するなど、重高以降は実務に就いて重用された。

幕末の藩主慶永は天保14年（1843）の初入国直前、水戸藩主徳川斉昭に領国統治の助言を仰いでいる<sup>16)</sup>。その斉昭の助言の中で友山の著書「武道初心集」がとり上げられている（句読点は筆者、以下同じ）。

（前略）士道のせんさくハ御家中ニテ著述の初心集等実ニ感入候事ニ候。拙家ニテハ城中番所々々へ着具預ケ置、長日坐睡りの代りニ折々着用為致候事ニ候処、近頃経書并右初心集一部ツ、番所々々へ預ケ申候。乍小事御家中ニテ出来候書の事故御吹聴申候。

これは、慶永の「武道修練之事并家中之者武道ニ向ひ候様引立方心得之事」という内容の問いに対する斉昭の答えの中にある一文である。元々は学問の家系・田安家の生まれであることから、慶永が既に友山、或いはその著書の存在を認識していたという可能性はないではないが、認識していたとしても自らの問いに対する答えには結びついていなかったであろう。しかし、斉昭は「武道初心集」を高く評価し、水戸藩での活用の事例も紹介している。そして、慶永の認識は何れにせよ、少なくとも斉昭は「御家中ニテ著述」「御家中ニテ出来」と「武道初心集」を福井藩士大道寺友山の著書として認識していることがわかる。ちなみに「明道館書目」<sup>17)</sup>の雑書之部には「武道初心集 七部三冊ツ、」とあり、藩校に備えられていたことが確認できる。斉昭の助言との関連は明らかではないが、他の書物はおおよそ1部であり、「武道初心集」の7部は突出している。

また、慶永自身は晩年に「岩淵夜話」を書き写しており<sup>18)</sup>、その書写本には次の奥書がある。

此岩淵夜話者、余か家来大道寺友山翁の著述なり。此家にも一部ハありたれと、明治維新の際藩政之ころ学校へ納めたるものとしらるゝ也。よつて徳川達孝君の所持せしを借りて写したり。し

かれとも読かたきところ欠字衍字あるハ、あやまりも多かれと其まゝに書伝りぬ。見る人々心してよミぬへし。

明治十八年三月五日より五月十四日まで

写し畢りぬ

正二位松平慶永（花押）

「余か家来」大道寺友山の著書「岩淵夜話」は福井松平家でも一部所蔵していたが、藩政期に藩校へ納めたため手元にないとし、田安家当主徳川達孝<sup>さとたか</sup>から借り受け、二月余りをかけて書き写している。友山の没後150年、既に近代に入っているが、「余か家来」という認識から友山は福井藩・福井松平家にとって重要な位置づけにあったことが窺える。そしてその認識は福井藩大道寺家として代々仕えた重高以降の存在によって保たれていたと考えられる。

### おわりに

以上、大道寺友山と福井藩の関わりを見てきた。友山が福井藩に召し抱えられていた期間は藩史上でもそれ以後の藩政を左右した重要な時期であった。召し出すまでの経緯や召し抱えていた間の具体的な関わりは未だ明らかではないが、藩主吉邦の意思が強く働いたことは確かであろう。そして友山の福井藩での成果ともいえる「越叟夜話」の目的は、本家・嫡家関係の検証だけでなく藩政の是正を念頭に置いた藩士の意識向上にもあったと考えられる。また、著書の成立との関わりは一部に止まったが、友山にとっても福井藩に召し抱えられていた期間は複数の著書の成立、或いはその準備段階として重要な時期であったと考えられる。

友山と重高以降では兵法家から近臣・寄合とその役割は変化したが、変化させながら重高以降も福井藩・福井松平家に重用され、藩政にも関わる家となった。しかし、何れも概略に止まり、具体的な動きは明らかにできていない。また、福井藩には儒学者でいえば藩儒の伊藤家や前田家、系譜編纂にも携わった野路家、軍学者でいえば義経流の井原家や友山と同時期に召し出された武田流の明石家などがあつた。彼らと友山との関わりは友山の福井藩での具体像を見る上で検討が必要であると考えられる。今後の課題としたい。

### 注

- 1) 本稿では福井藩を基礎作つた北庄藩、結城秀康・松平忠直代を含む。
- 2) 福井県立図書館松平文庫131(M22-45)「越叟夜話」『写真複製本127・128・130』。『福井市史』第4編 近世二（福井市、1988年）39～68頁に全文の翻刻が掲載されている。『写真複製本』については注4参照。
- 3) 徳岡国三郎「大道寺友山と武道初心集」（『歴史地理』第73巻第2号、日本歴史地理学会、1939年）、大道寺友山著・古川哲史校訂『武道初心集』（岩波書店、1943年）、古川哲史「大道寺友山について」（『近世日本思想の研究』、小山書店、1948年）、同「武道初心集とその思想」（『武士道の思想とその周辺』、福村書店、1957年）、森銚三「落穂集とその著者大道寺友山」（『森銚三著作集』第11巻、中央公論社、1988年）、大道寺弘義「大道寺友山と大道寺家」（『大道寺友山 その人間像と教育思想』、新潟日報事業社、1999年）、中嶋英介「大道寺友山の士道論」（『文化』第71巻第1・2号、東北大学文学会、2007年）、同「大道寺友山『武道初心集』考」（『書物・出版と社会変容』9号、「書物・出版と社会変容」研究会、2010年）など。

- 4) 福井県立図書館が旧福井藩主家の松平家から寄託されている一万点超の藩政資料や国書・漢籍など。一部は複製資料が製本化されており、文書館で閲覧できる。
- 5) 笠谷和比古「武士道概念の史的展開」(『日本研究』第35集、国際日本文化研究センター、2007年) 270頁。
- 6) アレキサンダー・ベネット『武士の精神とその歩み - 武士道の社会思想史的考察 -』(思文閣出版、2009年) 146頁。
- 7) 長野栄俊「貞享期における越前松平家の家史編纂 - 『家譜』『世譜』編纂前史 -」(『若越郷土研究』第53巻2号、福井県郷土誌懇談会、2009年)、同「越前松平家の家史編纂について - 『家譜』『世譜』の史料解題 -」(『越前松平家家譜 慶永 5』福井県文書館史料叢書8、福井県文書館、2011年)。
- 8) 舟澤茂樹「越前松平家の官位家格について」(『福井県地域史研究』4号、福井県地域史研究会、1974年)、同「福井藩の変遷と福井松平家」(『日本海地域史研究』第14輯、文献出版、1998年)、永井博「福井藩主松平宗矩の家格昇進運動 - 一橋小五郎の養子をめぐって -」(『茨城県立歴史館報』第32号、茨城県立歴史館、2005年)。
- 9) 『福井市史』資料編4 近世二(福井市、1988年) 936~937頁。
- 10) 『国事叢記』上(福井県郷土誌懇談会、1961年) 396頁。原本は松平文庫151(M31-13)『写真複製本151-1』~『写真複製本151-15』。
- 11) 『国事叢記』上、484頁。
- 12) 大道寺弘義氏前掲書。
- 13) 松平文庫919(仮131)「姓名録」『写真複製本919-1』~『写真複製本919-10』。
- 14) 松平文庫917(仮695)「剥札」『写真複製本917-1』~『写真複製本917-6』。
- 15) 松平文庫210(M22-27)「越城亀鑑」『写真複製本204・208・210』。
- 16) 福井市立郷土歴史博物館蔵福井市春嶽公記念文庫「徳川斉昭書状松平慶永添書」。
- 17) 松平文庫750(仮397)「明道館書目」『写真複製本750-1』『写真複製本750-2』。
- 18) 松平文庫1583(MH289-23)「岩渕夜話」。